

法律相談は12月18日(土)午後1時からです

希望する方は、12月11日までに、町文化会館へ申し込んでください

人間は、自分の力を十分に出しているという意識をもってるとき、生き生きとしています。つまり「生きがい」をもってるときに自分の存在感があり、これが喜びになっているのです。

どのような「生きがい」をもち、どのように社会の中で生きようとするか、この方向づけをすることが進路選択といえるのではないのでしょうか。ですから、親や先生が「このようにしてみたら」と必要に応じて子どもに助言することは必要なのですが、「こうしなさい」と親が子どもの将来を決めてしまつたのでは本当の進路選択にはなりません。

進路選択

やがて一人立ちする子どもたちは、自分の進路を自分の手で切り開いてもらいたいものです。

そのために、子どもが自分の将来に希望をもち、将来の生き方を考え、自分の意志で進路選択ができるように、ふだんからよりよい情報提供者になることが大人の大切な役割です。最近では、小学校低学年の児童にも学習塾から勧誘のパンフレットが送られてくるそうです。

親としては、我が子も塾に行かせなければというあせりの気持ちをもつようです。そして子どもに将来のことを十分に考えることを求めないで塾へと駆り立ててしまうことも



あるでしょう。

しかし、これからの社会、学歴だけが価値あるものとして通用していくのでしょうか。

多くの企業では、すでに、学歴よりも能力や意欲を重視しているようです。

親はよき

助言者となろう

人事管理として自己の申告制度を採用している企業等が増えています。

どういう場で力を発揮したいか、どういう能力をもっているか、自分が予想する数年後の姿などを申告してもらい、この申告をガイドにしてその人の力を引き出そうとしているのです。

子どもは自分をよく見つめる機会がありません。たとえそのような機会があったとしても、自分の将来像に自信はないでしょう。子ども自身が、自分の性格や長所などを見極めることは難しいことです。

そこで、親が子どもの様子をよく

見て具体的な言動の中から長所をあげ、それに気づかせることが大切です。自己を知ることが進路選択に極めて重要な要素になるはずですが。

長所を更に伸ばし、能力を社会に生かすような方向づけを子ども自身でできるようにすることです。

小学生時代の夢がだんだん現実味を帯び、子どもの将来の希望へとつながっていく、やがて子どもの心の中に「人生の目標」が育っていくでしょう。

中学校卒業時には、高校や高等専門学校、専修学校へと進学、家事従

事、就職、職業訓練校での専門的訓練等、進路選択の幅が増えます。

子どもの進路指導は小学校でも行っていますが、中学校では入学と同時に始まります。

しかし、具体的・本格的な進路の選択指導は、たいていは、三年に進級してから行われます。

親は学校と連絡を密にして子どもの希望や将来展望、家庭の諸条件、通学、通勤の時間等を考慮に入れながら、中学校卒業後の進路の選択について子どものためにより適切な、より具体的な情報提供者になることが大切です。

中学卒業生の進路は、ここ数年約94%が高校や高等専門学校への進学で就職者はだんだん減っています。親も子も高校は出ていた方がいいという考え方がごく一般的になりつつあります。

しかし、子どもが希望する進路にとつて高校へ行くことが本当に道を開くことになるのかを見直すことを含めて、目的意識をもって高校へ進学できるように子どもを助けてやる必要があります。

親は子どもが自分の人生を自ら切り開いていく姿勢を高く評価する態度で、子どもの進路選択の援助をして欲しいものです。

参考までに

高校中途退学者 全国で年間12万人
千葉県では4000人強
定員360名/400名として高校を三校以上廃校していることになる。
進路選択の誤りである。

社会教育指導員・宇野克彰

